

12. 多変数のテイラーの定理, 関数の極大・極小

多変数の(スカラー値)関数を
考へよ。記述を簡単にするため
2変数の場合に限る。

● 2変数のテイラーの定理

復習 1変数のとき

- ・ 微分可能性

$$f(x) = f(a) + A(x-a) + o(x-a) \\ (x \rightarrow a) \quad A = f'(a)$$

- ・ 平均値の定理

$$f(x) = f(a) + f'(c)(x-a) \\ \text{とある } c \text{ が } a \text{ と } x \text{ の間に存在}$$

• テイラーの定理 (2次のとき)

$$(1) \quad f(x) = f(a) + f'(a)(x-a) + \frac{f''(c)}{2!} (x-a)^2$$

とある c は a と x の間に存在する

$$(2) \quad f(x) = f(a) + f'(a)(x-a) + \frac{f''(a)}{2!} (x-a)^2$$

$$+ o((x-a)^2)$$

($x \rightarrow a$)

以下 今後は \mathbb{R}^2 とし、断片的に D 上で f と書いたら

• D は \mathbb{R}^2 の開集合

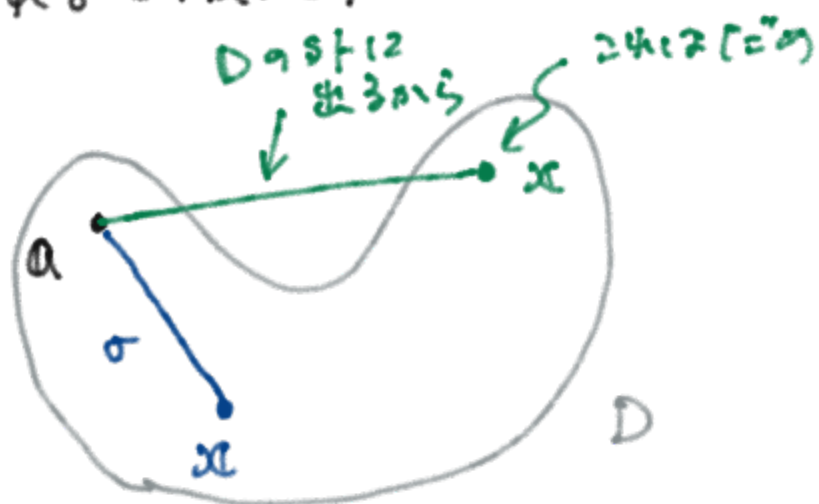
• f は $f: D \rightarrow \mathbb{R}$ という関数

とあると約束する。

定理 12.1 (2変数の平均値の定理)

f は D 上 C^1 級とある。

$a, x \in D$, $a \neq x$ とし, さらに
 a と x を結ぶ線分 σ が D に
含まれると仮定する。



そのとき, σ 上の両端以外の点
 c であって

$$f(x) = f(a) + \underbrace{\nabla f(c)}_{\text{横ベクトル}} \underbrace{(x-a)}_{\text{縦ベクトル}}$$

をみたすものが存在する。

定理 12.2 (2変数のテイラーの定理, 2次の場合) f は D 上 C^2 級とある.

(1) $a, x \in D$, $a \neq x$ とし, a と x を結ぶ線分 σ が D に含まれると仮定する. そのとき σ 上の両端以外の点 c として

$$\begin{aligned} f(x) = & f(a) + \nabla f(a)(x-a) \\ & + \frac{1}{2} \left(f_{xx}(c)(x-a)^2 \right. \\ & \quad + 2f_{xy}(c)(x-a)(y-b) \\ & \quad \left. + f_{yy}(c)(y-b)^2 \right) \end{aligned}$$

をみたすものが必ず存在する. $r = r = c$

$$x = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \quad a = \begin{pmatrix} a \\ b \end{pmatrix}.$$

(2) $a \in D$ とある。 D の点 x に対し
 a に近づくと

$$f(x) = f(a) + \nabla f(a) (x-a) + \frac{1}{2} \left(f_{xx}(a) (x-a)^2 + 2 f_{xy}(a) (x-a)(y-b) + f_{yy}(a) (y-b)^2 \right) + o(|x-a|^2)$$

が成り立つ。

注 (2) の □ 部分を f の a における 2次テイラー多項式 という。

注 □ は

$$f(a) + \nabla f(a) (x-a) + \frac{1}{2} (x-a \ y-b) H \begin{pmatrix} x-a \\ y-b \end{pmatrix},$$

$$H = \begin{pmatrix} f_{xx}(a) & f_{xy}(a) \\ f_{yx}(a) & f_{yy}(a) \end{pmatrix}$$

と表せる。(注意: 定理 9.3 には $f_{xy} = f_{yx}$.) H を f の a に対応する

ヘッセ行列 とよぶ。

例 $f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$, $f(x, y) = e^{x+y}$.

f は \mathbb{R}^2 上の C^2 級. 原点に於ける
2次テイラー多項式 $P_2(x, y)$ を
求める.

$$f_x = f_y = f_{xx} = f_{xy} = f_{yx}$$

$$= e^{x+y}$$

2", 3の原点にBITを通る。

よ、2

$$P_2(x, y) = 1 + (1 \ 1) \begin{pmatrix} x-0 \\ y-0 \end{pmatrix}$$

$$+ \frac{1}{2} (x-0 \ y-0) \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x-0 \\ y-0 \end{pmatrix}$$

$$= 1 + x + y + \frac{1}{2} \underbrace{(x \ y) \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 1 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}}_{\text{"}}$$

$$(x+y \ x+y)$$

$$= 1 + x + y + \frac{1}{2} (x+y)^2.$$

[定理 12.1, 12.2 (1) の証明の
スケッチ] $c(t) = a + t(x-a)$
と置き

$$F(t) = f(c(t))$$

と定める. F は $[0, 1]$ を含む
開区間 \mathcal{I} で定義された関数.
 \mathcal{I} には 定理 5.2 や 定理 7.1 を
適用できる.

$$\begin{aligned} F'(t) &= \nabla f(c(t)) \cdot c'(t) \\ &= \nabla f(c(t)) (x-a) \\ &= f_x(c(t)) (x-a) \\ &\quad + f_y(c(t)) (y-b) \end{aligned}$$

\mathcal{I}

$$\begin{aligned}
 F''(t) &= \left(f_{xx}(c(t))(x-a) \right. \\
 &\quad \left. + f_{xy}(c(t))(y-b) \right) (x-a) \\
 &\quad + \left(f_{yx}(c(t))(x-a) \right. \\
 &\quad \left. + f_{yy}(c(t))(y-b) \right) (y-b) \\
 &= f_{xx}(c(t))(x-a)^2 \\
 &\quad + 2f_{xy}(c(t))(x-a)(y-b) \\
 &\quad + f_{yy}(c(t))(y-b)^2.
 \end{aligned}$$

定理 5.2 (2) より

$$F(1) = F(0) + F'(t_0) \cdot 1$$

をみたす $t_0 \in (0, 1)$ が存在する。

$$c = c(t_0) = a + t_0(x-a) \quad \text{とおく}$$

この式を書き直したところから定理 12.1.

また定理 7.1 (2) より

$$F(1) = F(0) + F'(0) \cdot 1 + \frac{F''(t_1)}{2!} \cdot 1^2$$

をみたす $t_1 \in (0, 1)$ が存在する。

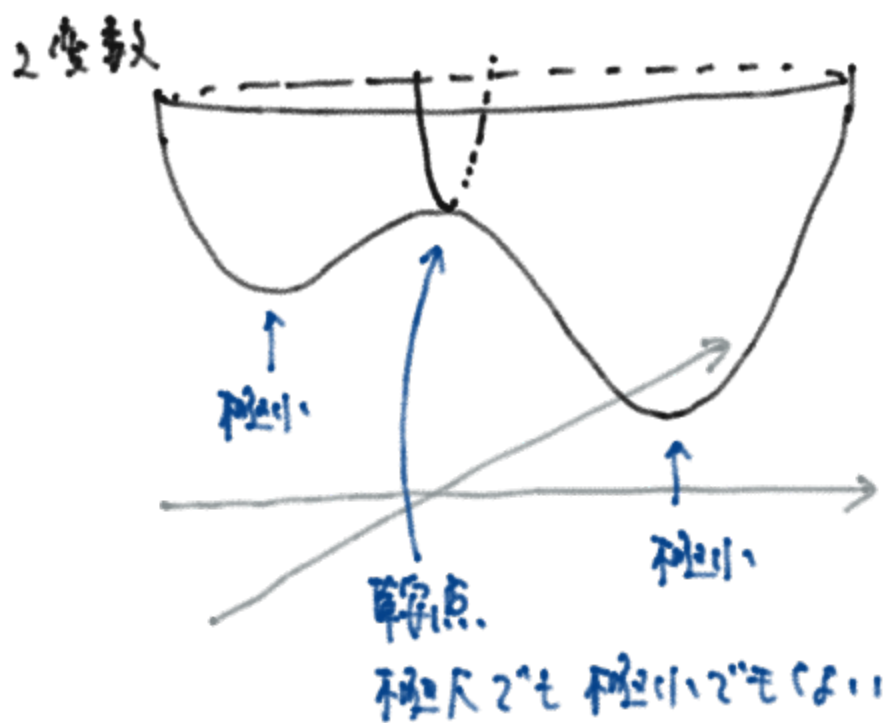
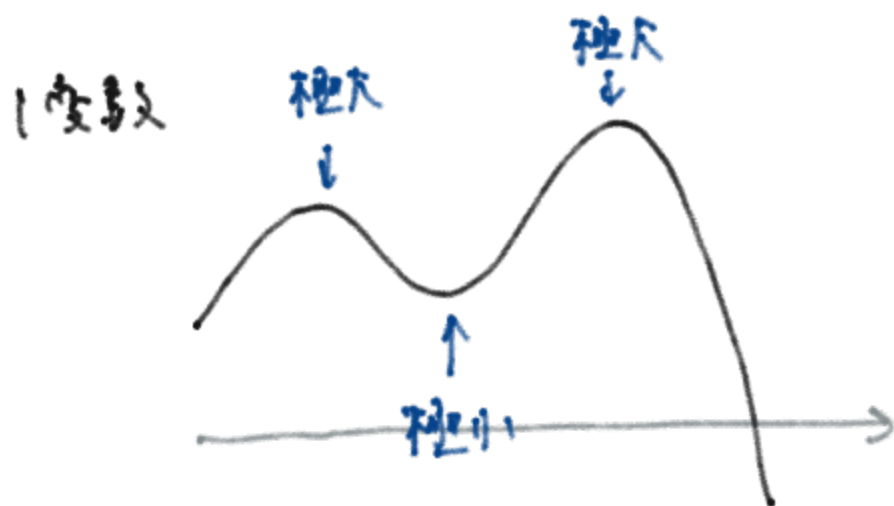
これを著すか之に (2) の定理 12.2

(1) である。 \square

定理 12.2 (2) は (1) から従う。

詳しくは教科書 pp. 189-190.

① 関数の極大・極小



定義 点 $a \in D$ において f が

極大値 [極小値] をとるとは、

a を中心とする D に含まれる

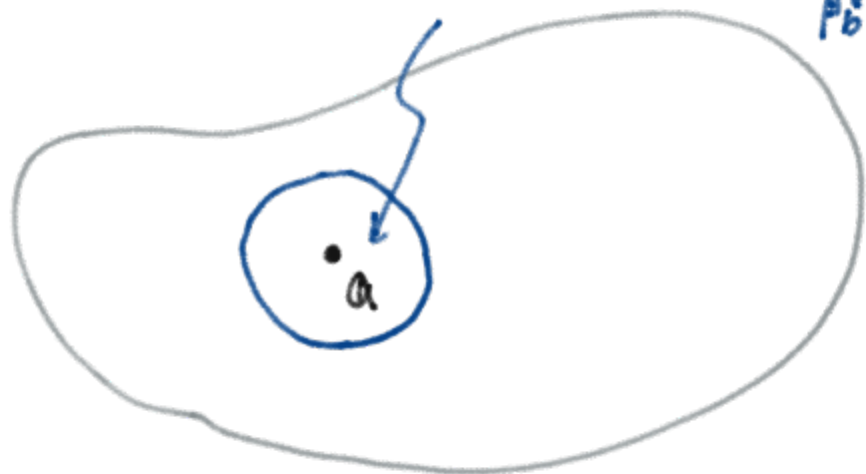
ある開円板において

$$x \neq a \rightarrow f(x) < f(a)$$

$$[f(x) > f(a)]$$

が成り立つことをいう。

この中での f の値の範囲
問題



極大値と極小値をあわせて 極値 と
いう。

1変数のときと同様に次の
成り立つ。

命題 12.3 f は C^1 区間で
ある。このとき

$a \in D$ において f の極値値 ε と

$$\Rightarrow \underline{f_x(a) = f_y(a) = 0.}$$

↑
このとき a は f の 臨界点 と
あるという。

[証明] $a = (a, b)$ とおく。 $g_1(x) =$
 $f(x, b)$ と定めると $x = a$ は g_1 の
極値値 ε であるから

$$0 = g_1'(a) = f_x(a, b).$$

$f_y(a, b)$ についても同様。 \square

C^1 級ならば, 臨界点 (a, b) の
極値をとる点の候補になる。

問題 臨界点 (a, b) があるとき,
極値をとるかどうかの判定可能か?

(a, b) を臨界点とする。 f の
 C^2 級ならば, 定理 12.2 (2) より

$$f(x, y) = f(a, b)$$

$$(12.1) \quad + \frac{1}{2} (x-a, y-b) H \begin{pmatrix} x-a \\ y-b \end{pmatrix} \\ + o\left((x-a)^2 + (y-b)^2\right).$$

↑↑↑

$$H = \begin{pmatrix} f_{xx}(a,b) & f_{xy}(a,b) \\ f_{yx}(a,b) & f_{yy}(a,b) \end{pmatrix}$$

$$=: \begin{pmatrix} A & B \\ B & C \end{pmatrix} \quad \text{とおく.}$$

式(12.1)より, (a,b) 近傍 \mathcal{D} の f の
 \mathcal{D} の 2 次近似は, ほぼ


$$(x-a \quad y-b) H \begin{pmatrix} x-a \\ y-b \end{pmatrix}$$


$$\left(= A(x-a)^2 + 2B(x-a)(y-b) + C(y-b)^2 \right)$$


\mathcal{D} 決まることを示さなければならない。

\square は, A, B, C の 1 通に於て

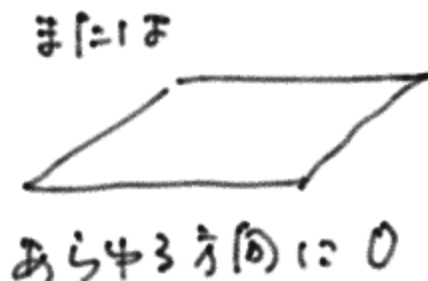
以下のいずれかの性質をもつ.

7-2 ① $(x, y) \neq (a, b)$ 
 $\Rightarrow \square > 0$.

7-2 ② $(x, y) \neq (a, b)$ 
 $\Rightarrow \square < 0$.

7-2 ③ \square は正に ∞ , $|\cdot|$
負に ∞ , $|\cdot|$ あり. 

7-2 ④ \square はある方向に
漸近線ありとありと 0



具体的に区間を2分る。

(i) $A \neq 0$ のとき

$$\boxed{\quad} = \underbrace{A} \left(x-a + \frac{B}{A}(y-b) \right)^2 + \underbrace{\frac{AC-B^2}{A}} (y-b)^2$$

(ia) $A > 0, AC - B^2 > 0$ $\gamma - 2$ ①

(ib) $A < 0, AC - B^2 > 0$ $\gamma - 2$ ②

(ic) $AC - B^2 < 0$ $\gamma - 2$ ③

(id) $AC - B^2 = 0$ $\gamma - 2$ ④

(ii) $A = 0$ のとき

(iia) $B \neq 0$ ($\Leftrightarrow AC - B^2 < 0$) のとき

$$\boxed{\quad} = 2B(y-b) \left(x-a + \frac{C}{2B}(y-b) \right)$$

$\gamma - 2$ ③.

$$(iib) \quad B=0 \quad (\Leftrightarrow \quad AC-B^2=0) \quad \text{a t t e r}$$

$$\boxed{\quad} = C(y-b)^2 \quad \gamma-2 \quad (4)$$

またおぼろと

$$\gamma-2 \quad (1) \quad \Leftrightarrow \quad A > 0, \quad AC-B^2 > 0.$$

$$\gamma-2 \quad (2) \quad \Leftrightarrow \quad A < 0, \quad AC-B^2 > 0.$$

$$\gamma-2 \quad (3) \quad \Leftrightarrow \quad AC-B^2 < 0.$$

$$\gamma-2 \quad (4) \quad \Leftrightarrow \quad AC-B^2 = 0.$$

この2つの区間は、 $\gamma-2$ の値によって異なる。
↑ 2 3 .

定理 12.4 f は C^2 級とある。

このとき、臨界点 $(a, b) \in D$ に

おいて、 Λ の行列を $H = \begin{pmatrix} A & B \\ B & C \end{pmatrix}$

とあると、

(1) $\det H > 0$ のとき

$A > 0$ ならば f は (a, b) で極小値をとる。

$A < 0$ ならば " " で極大値をとる。

(2) $\det H < 0$ のとき

f は (a, b) で鞍点をとる。

(3) $\det H = 0$ のとき

この方法ではわからない。

注 証明はついで.

γ -2 ① } 式 (12.1) の
② } 項 $0((x-a)^2 + (y-b)^2)$
③ } は 極大・極小に
影響をもちない.

γ -2 ④ } この項の影響が
無視できる.

詳しくは 教科書 pp. 197-199.

注 (1) の $A \geq 0$ という条件は
 $\text{Tr } H \geq 0$ におきかえることが
できる.

注 3変数以上のものと複雑.
詳しくは 線形代数学 II (12).

$$43.1 \quad f: \mathbb{R}^2 \rightarrow \mathbb{R}$$

$$f(x, y) = x^2 - y^3 - 2xy + y.$$

Step 1 臨界点をすべて求める。

$$f_x = 2x - 2y$$

$$f_y = -3y^2 - 2x + 1$$

1の2"

$$f_x = f_y = 0$$

$$\begin{array}{l} \frac{1}{-3}x \\ \frac{1}{1} \end{array}$$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} x = y \\ -3x^2 - 2x + 1 = 0 \end{cases}$$

$$\Leftrightarrow (x, y) = (-1, -1) \text{ 及 } \frac{1}{3} \text{ 及 } \frac{1}{3}.$$

STEP 2 答を判定する。

$$f_{xx} = 2.$$

$$f_{xy} = f_{yx} = -2,$$

$$f_{yy} = -6y.$$

点 $(-1, -1)$ での z'' の Hessian 行列は

$$H = \begin{pmatrix} 2 & -2 \\ -2 & 6 \end{pmatrix}$$

z'' , $\det H = 8 > 0$, $(1, 1)$ 成分
は正。ゆえに $(-1, -1)$ での z'' は
極小値をとる。

点 $(\frac{1}{3}, \frac{1}{3})$ での z'' は

$$H = \begin{pmatrix} 2 & -2 \\ -2 & -2 \end{pmatrix}$$

z'' , $\det H = -8 < 0$. この点での z''
は鞍点をとる。